JAPAN FOUNDATION FOR PEDIATRIC RESEARCH

News Letter No.13

子どもたちの世紀

春夏号

公益財団法人 小児医学研究振興財団

2015年4月1日

研究・留学費を支援します！

- **平成24年度 研究助成金交付者の研究成果発表について**
  （平成27年4月18日【土】於 第118回日本小児科学会学術集会）
- **平成26年度 研究助成金等支援事業　審査結果報告**
- **市民公開講座「知っておきたい小児の感染症ABC!!」のお知らせ**

平成27年度
研究助成金・海外留学フェローシップ
応募要項

小児プライマリ・ケア研究の進展をめざして

慶應義塾大学医学部小児科・
慶應義塾大学病院
卒後臨床研修センター
関口　進一郎

子どもを診るすべての医師が小児プライマリ・ケアにかかわっている。このような認識が、小児プライマリ・ケア研究の発展には欠かせない。

我が国でプライマリ・ケアという語が用いられるとき、それが意味するところは地域保健医療計画や救急医療体制における初期診療や一次医療に限定されやすい。小児プライマリ・ケアでは、common diseasesを診ること、健診や予防接種、園医・学校医の活動が中心であり、その担い手はおもに開業医である、したがって小児プライマリ・ケア研究は開業医こそがすべきである、と考えられているきらいがある。一方で、subspecialtyの専門をもって診療している医師にとっては、自分はプライマリ・ケアに携わっていないからあまり関係がないように感じられるのかもしれない。

しかし、プライマリ・ケアの概念を見直してみると、それは決して初期診療や一次医療に限定されるものではないことがわかる。米国国立科学アカデミー（1996年）による定義では「プライマリ・ケアとは、患者のもつ問題の大部分に対処でき、継続的なパートナーシップを築き、家族や地域という枠組みのなかで責任をもって診療する臨床医によって提供される医療で、総合性と受診のしやすさを特徴とする」と表現されている。言い換えれば、患者の立場からみて、受診しやすく、家庭生活や日常生活を含めて総合的に継続して診てもらうことができ、安心して任せられる関係が構築されているような医療がプライマリ・ケアである。したがって、患者の疾病がcommon diseaseであるかどうか、医師が開業医か勤務医か、医療の場が一次医療機関か高次医療機関かは本質的な問題ではない。患者がどの専門領域の疾病をもっていようとも、医師がどの医療機関に勤めていようとも、子どもの健康上の問題を引き受け、総合的、継続的に診療していこうとしているならば、その医師は小児プライマリ・ケアの一翼を担っているといえる。このように小児プライマリ・ケアを広義に捉えたうえで、子どもを診るすべての医師に小児プライマリ・ケア領域の話題に注目してもらう必要がある。

問題は、小児プライマリ・ケアが独立した専門分野として認識されるかどうかである。小児プライマリ・ケア領域の臨床研究であっても、その題材が予防接種なら『感染症』に、成長なら『内分泌』に、発達なら『神経』にというように発表の場は各専門領域になりはしないだろうか。ならば小児プライマリ・ケア研究の独自性はどこにあるのか。欧米では医療情報処理技術を応用し、医療の質や効率性、患者の満足度、リスクマネジメントなど、医療サービスの質の向上や安全に関する研究が進んでいると聞く。我が国ではそれらがどうなっていくのか、明確な展望を持ち合わせていないが、プライマリ・ケアの原点、患者の視座に立ち返って研究のテーマを考えることが重要と思っている。

当財団では、毎年度優秀論文の表彰を行っています

平成26年度 小児医学研究振興財団アワード受賞者

上田　理誉	国立成育医療研究センター　総合診療部	小児専門病院における乳幼児突発性危急事態112例 日本小児科学会雑誌2014；118(8)：1213-1218
高尾　大士	大阪愛染橋病院 総合周産期母子医療センター	Predicting onset of chronic lung disease using cord blood cytokines Pediatrics International 2014；56(4)：566-570

平成26年度 日本イーライリリーアワード受賞者

安村　明	国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所　知的障害研究部	Neurobehavioral and hemodynamic evaluation of Stroop and reverse Stroop interference in children with attention-deficit /hyperactivity disorder Brain & Development 2014；36(2)：97-106
川谷　恵里	福岡大学医学部小児科	児童虐待と判断した急性薬物中毒入院例の背景 小児の精神と神経 2014；54(2)：157-164

日本小児科学会雑誌

PEDIATRICS INTERNATIONAL

第117回 日本小児科学会学術集会での表彰式

平成27年度　アワード選考要項

① 右記機関誌に掲載された、優れた研究論文を表彰する。
② 選考は各機関誌を発行する学会から優秀論文として推薦を受け、当財団の選考委員会において選考を行い、1件30万円、総計4件120万円を筆頭筆者へ授与する。
③ 平成27年12月31日時点で原則として、満40歳未満の執筆者を対象とする。

選考対象誌（平成27年1月～12月発行）

① 日本小児科学会機関誌
「**日本小児科学会雑誌**」、「PEDIATRICS INTERNATIONAL」から各1編
②-1）日本小児神経学会機関誌
「**脳と発達**」、「Brain&Development」から1編
②-2）日本小児精神神経学会機関誌「**小児の精神と神経**」または
日本小児心身医学会機関誌「**子どもの心とからだ**」から1編
※ ②-1）、②-2）の優秀論文はイーライリリーアワードとして表彰する。

選考結果発表

平成28年3月上旬に当財団ホームページ上で発表のうえ、平成28年第119回日本小児科学会学術集会会場にて表彰する。

平成26年度 研究助成金・海外留学フェローシップ交付対象者

平成26年度交付対象者が下記のとおり決定いたしました。

研 究 助 成 金

(1) 小児科領域全般

澤　新一郎	東京大学大学院医学系研究科免疫学・助教	新生児腸管免疫系成熟機構の解明　副題:母乳による腸内細菌垂直伝播の証明
武内　俊樹	慶應義塾大学医学部臨床遺伝学センター・助教	新規に確立した過成長症候群の発症機序の解明と治療法の開発
古庄　知己	信州大学医学部附属病院 遺伝子診療部・准教授	デルマタン4-*O*-硫酸基点移酵素-1欠損に基づくエーラス・ダンロス症候群(DDEDS)の病態解明と治療法の開発
藤本　崇宏	京都府立医科大学大学院医学研究科 分子病態病理学・講師(教員)	神経型ジストロフィンDp40の分子病態解析に基づく知的障害治療法の探索
永岡　唯宏	新潟大学大学院医歯学総合研究科・研究員	Rett症候群に於けるシナプス形成異常の本態解明を目指して 副題:MeCP2の下流因子がRett症候群の発病に果たす役割
河野　大輔	群馬大学・先端科学研究指導者育成ユニット先端医学 生命科学研究チーム生活習慣病分野　河野研究室・助教	視床下部摂食代謝中枢DNAメチル化による胎児プログラミング機構の解明 副題:視床下部摂食代謝中枢におけるDNAメチル化の制御機構とその生理的役割の解析
辻　雅弘	(独)国立循環器病研究センター 再生医療部・室長	新生児低酸素性虚血性脳症の転帰規定因子の同定および低体温療法への応用
浅田　礼光	富士重工業健康保険組合太田記念病院 小児科医師	子宮内における個体発生後期の血管新生メカニズムの解析:早産児が高血圧、 耐糖能異常などの生活習慣病を発症しやすくなる機序の解明と予防法開発を目指して
下村　健寿	福島県立医科大学医学部 腫瘍生体エレクトロニクス講座・特任教授	重症型新生児糖尿病、DEND症候群における脳神経症状の病態解明と 治療法の確立

(2) ジャパンワクチン感染症及び感染症予防ワクチン

大塚　岳人	ニューヨーク州立大学バッファロー校 Clinical and Translational Research Center Department of Medicine,Division of Infectious Diseases 博士研究員 (新潟大学小児科から留学中)	モラキセラ・カタラーリスのワクチン候補抗原に対する抗体価推移 ～健常小児のモラキセラ・カタラーリス保菌との関連～
橋口　隆生	九州大学医学研究院 ウイルス学・助教	ムンプスウイルスワクチンの有効性の構造基盤の解明 副題:構造生物学的手法を用いて ワクチンの最も重要な分子である糖蛋白質の構造を決定し、その有効性の基盤を解明する
菖蒲川由郷	新潟大学大学院医歯学総合研究科 国際保健学分野・准教授	本邦における小児RSウイルス感染症の分子疫学と患児の臨床経過と ウイルス量の変化
森川　和彦	東京都立小児総合医療センター 臨床研究支援センター　医員	感染症予防ワクチンの有効性・安全性に関する研究「成人の4種混合(DTP-IPV)ワクチン接種の百日咳パンデミック予防のための至適ワクチン接種量設定のための多施設共同二重盲検化ランダム化比較試験および長期追跡研究」
中内　美名	国立感染症研究所　インフルエンザウイルス 研究センター　主任研究官	C型インフルエンザの簡易ウイルス遺伝子検出法の構築とその臨床現場への応用
藤井ひかる	国立感染症研究所ウイルス第一部・研究員	単純ヘルペスウイルス1型及び2型臨床分離株の薬剤耐性能と その責任塩基配列の関連性データベースの構築
樋泉　道子	長崎大学大学院医歯薬総合研究科　新興感染症病態制御学専攻　熱帯小児感染症学分野 博士課程大学院生	ベトナム・カンホア省で発生した先天性風疹症候群の神経発達学的追跡調査

海外留学フェローシップ

(1) 日本イーライリリー海外留学フェローシップ

中村　信嗣	香川大学医学部小児科　助教	胎児羊における大脳皮質感覚野における神経血管カップリングの発達的変化の解明
市川佳世子	京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻　博士後期課程2年	親のアタッチメント行動によるADHD発症予防効果と ストレス関連バイオマーカーとの関連

(2) ジャパンワクチン海外留学フェローシップ

君塚　善文	慶應義塾大学医学部呼吸器内科教室・ 共同研究員	近赤外レーザーの物理的免疫賦活化作用を用いた インフルエンザ粘膜ワクチンの開発

平成24年度研究助成金交付者の研究成果発表

第118回日本小児科学会学術集会(大阪国際会議場)で研究成果発表を行います。

ポスター掲示：4月17日(金)～4月19日(日)
ポスター発表：4月18日(土) 14:30～15:00
3階イベントホールB～E

※座長：別所　文雄(日本医療科学大学保健医療学部教授)

平成27年度　研究助成金・海外留学フェローシップ応募要項

［応募受付期間　平成27年11月2日（月）～12月2日（水）］

研究助成金【小児科領域全般に関する研究】

応募要項

1）研究助成金：1件　200万円以内
2）助成対象研究課題：
① 新しい感染症や急性疾患の診断・治療に関する研究
② 小児の難治疾患、慢性疾患の本態解明と治療に関する研究
③ 生活習慣病の予防に関する研究
④ 遺伝子治療など高度先進的医療の開発のための基礎的研究
⑤ いじめ、虐待、拒食、不登校など子どもの心のケアや心身症に関する研究
⑥ 生命倫理など社会的問題に関する研究
⑦ 国際医療協力の基盤となる母子保健に関する研究
⑧ その他、子どもの健康に関する研究
3）助成対象者：
過去3年間に当財団の研究助成金を受けていない者で、次に該当する者。
① 小児科の基礎的研究、臨床研究等に従事し、日本国籍を有する医師・研究者で、平成27年12月31日時点で50歳未満の者。
② 助成対象研究をテーマとする研究会、シンポジウムの開催者。

応募方法

当財団の定める交付申請書(当財団URLよりダウンロード)に必要事項を記入し、右記宛に送付。

締切：平成27年12月2日（水）必着

ジャパンワクチン研究助成金【感染症及び感染症予防ワクチンに関する研究】

応募要項

1）助成金額：1件　200万円以内
2）助成対象研究課題：
① 感染症の疫学と診断に関する研究
② 感染症予防ワクチンの開発に関する研究
③ 感染症予防ワクチンの有効性・安全性に関する研究
④ 感染症予防ワクチンの国際的ネットワークに関する研究
3）助成対象者：
過去3年間に当財団の研究助成金を受けていない者で、次の条件を満たしている日本国籍を有する小児科医師及びワクチンに関する研究者。
① 平成27年12月31日時点で40歳未満の者。
② 同一研究に対して過去に他から研究助成金を受けていないこと。

応募方法

当財団の定める交付申請書(当財団URLよりダウンロード)に必要事項を記入し、下記宛に送付。

締切：平成27年12月2日（水）必着

ジャパンワクチン海外留学フェローシップ【感染症及び感染症予防ワクチンに関する研究留学】

応募要項

1）海外留学奨学金：1件　350万円以内
2）対象研究：
① 感染症の疫学と診断に関する研究
② 感染症予防ワクチンの開発に関する研究
③ 感染症予防ワクチンの有効性・安全性に関する研究
④ 感染症予防ワクチンの国際的ネットワークに関する研究
3）応募資格：
原則として受賞後1年以内に出国し、海外の研究機関等において一定期間（原則1年以内)研究に従事できる者で、次の条件を満たしている者。
① 日本国籍を有する小児科医師及びワクチンに関する研究者。
② 具体的な研究又は研修計画を提示できること。
③ 同一研究に対して過去に他から海外留学奨学金を受けていないこと。
④ 研究終了後6ヶ月以内に研究報告書の提出ができること。
⑤ 平成27年12月31日時点で40歳未満の者。
※応募には所属長（大学の場合は学部長）の推薦書を添付のこと
※過去の受賞者の申請は不可

応募方法

当財団の定める交付申請書（当財団URLよりダウンロード）に必要事項を記入し、左記宛に送付。

締切：平成27年12月2日（水）必着

イーライリリー海外留学フェローシップ【発達障害に関する研究留学】

応募要項

1）海外留学奨学金：1件　180万円／総額　360万円
2）対象研究：
発達障害に関する基礎的及び臨床的研究
（発達障害の定義：精神遅滞、学習障害、運動能力障害、コミニュケーション障害、広汎性発達障害、注意欠陥/多動性障害など）
3）応募資格：
原則として、受賞後1年以内に出国し、海外の研究機関等において、一定期間（原則6ヶ月以内）研究や研修に従事できる者で、次の条件を満たしている者。
① 日本国籍を有するわが国の大学、医療機関、研究機関に所属する小児科医師および小児医療研究者。
② 具体的な研究または研修計画を提示できること。
③ 研究終了後６ケ月以内に研究報告書の提出ができること。
④ 平成27年12月31日時点で40歳未満の者。
※応募は1施設から1名とする。【所属長（大学の場合は学部長）推薦】
※過去の受賞者の申請は不可。

応募方法

当財団の定める交付申請書（当財団URLよりダウンロード）に必要事項を記入し、左記宛に送付。

締切：平成27年12月2日（水）必着

交付申請書の送付先及び照会先

公益財団法人 小児医学研究振興財団 事務局
〒110-0015 東京都台東区東上野3-32-2 廣瀬ビル４B
Tel:03-5818-2601　Fax:03-5818-2602
E-mail:shouni-iken@jfpedres.or.jp　http://www.jfpedres.or.jp

留学体験記

ロンドン留学報告

九州大学病院
小児科診療講師
實藤　雅文

私は、平成23年度イーライリリー海外留学フェローシップのご援助を頂き、2012年10月から1年間、英国King's College LondonのInstitute of Psychiatry (IOP)に留学することができました。留学するまでは、定型発達児や発達障害児を対象として、独学で近赤外線スペクトロスコピーを用いて研究を続けておりました。しかし、このやり方で良いのだろうかという気持ちがずっとあり、発達障害が研究テーマで、かつ脳機能画像のゴールドスタンダードであるMRI解析を広く勉強できるという理由によりIOPで学ぶことになりました。

私が所属していた研究室は、Neuroanatomy And Tractgraphy Laboratory (Natbrainlab)と名付けられ、拡散テンソルトラクトグラフィーの分野で世界をリードしています。神経線維がどのように脳内を走行しているかを拡散テンソル画像で詳細に描き出し、認知機能との関連を検証するだけでなく、種々の精神神経疾患で、それがどのように変容しているかを次々に明らかにしており、世界最先端の技術を目の当たりにすることができました。IOPでは、欧州をはじめとして、南米、アジアなど世界中から様々な研究者、学生が集っており、大いに刺激を受けることができました。逆に日本人留学生の少なさも実感しました。

私は、MRIの機能的結合解析を用いて、注意欠如多動性障害（ADHD）について、皮質線条体ネットワークの増強が多動/衝動性と、腹側前頭頭頂ネットワークの増強が注意欠如と関係していることを明らかにし報告しました。また同じくADHDについて、イタリアからの留学生、フランス出身の研究者と共に新しい研究プロジェクトの立ち上げにも関わることができ、本当に実り多い1年間でした。また実際に被験者として私自身の脳をMRIで撮影してもらったのも貴重な経験でした。研究目的での留学でしたが、IOPに併設された世界でも有数の精神科専門病院であるモーズレー病院で、ADHD外来の見学をさせて頂く機会もあり、診療面でも大いに参考になりました。この1年間で、これまで日本でやってきたやり方が間違っていなかったことが自分で納得できましたし、新しいことに挑戦する際にどのようにすればうまく物事を進められるかを身につけることができ、研究の幅を大きく広げることができたと感じます。

最後になりますが、今回の留学にご支援頂いた小児医学研究振興財団に、この場を借りて御礼を申し上げますとともに、今後もこのフェローシップをもとに、日本の多くの小児科医が素晴らしい経験をされることを願っております。

平成27年度 市民公開講座 ―入場無料―

知っておきたい小児の感染症ABC !!

日 時 ● 2015年9月6日（日）14:30～17:30
場 所 ● 練馬区立区民・産業プラザCoconeriホール（3階）

共 催（予定）：日本小児科学会
後 援（予定）：厚生労働省、練馬区、練馬区医師会
日本小児科医会、日本小児保健協会、
日本保育園保健協議会、日本産婦人科医会、
母子衛生研究会

プログラム（予定）

座 長：岩田　敏（慶應義塾大学医学部感染症学教授）

◆ 講演1：発疹と感染症
新庄　正宜（慶應義塾大学医学部小児科専任講師）

◆ 講演2：咳と感染症
尾内　一信（川崎医科大学小児科主任教授）

◆ 講演3：嘔吐・下痢と感染症
田島　　剛（博慈会記念総合病院副院長）

◆ パネルディスカッション

御　礼

賛助会員及び多くの協賛企業・寄附者の皆様のご支援により、
平成26年度は小児医療研究に携わる23名の研究者に研究・留学費の支援及びアワードの授与を行いました。
皆様のご支援に心より感謝申し上げます。

当財団の賛助会費（寄附金）は、確定申告の際、所得控除または税額控除が受けられます。

賛助会員（個人）

※敬称略 五十音順

赤司　俊二
安次嶺　馨
東　寛
熱田　裕
雨宮　伸
鮎沢　衛
新垣　義夫
荒川　浩一
有賀　正
有阪　治
飯塚　幹夫
五十嵐　隆
池本　博行
石井　正浩
位田　忍
井田　博幸
井田　孔明
板橋家頭夫
市田　蕗子
逸見　睦心
伊藤　悦朗
伊藤　末志
伊藤　進
伊藤　辰夫
伊藤　保彦
伊藤　雄平
稲垣　由子
稲葉　博士
猪股　弘明
今井　秀人
岩田　敏
岩田　力
岩元　二郎
内田　正志
内田　祐子
内山　聖
畝井　和彦
宇理須厚雄
江口　尚彦
衞藤　隆
衞藤　義勝
遠藤　文夫
小穴　慎ニ
老田　礼子
尾内　一信
大賀　正一
大川　洋ニ
大澤真木子
太田　節雄
太田　孝男
太田　秀臣
大塚　晨
大西　正純
小舘　三郎
大野　耕策
岡田　純一
岡田　満
岡部　一郎
岡本　博文
小川　俊一
沖　潤一
小口　学
奥山眞紀子
小栗　絢子
小田　慈
小田切美知子
小堂　欣彌
小野　厚
緒林　誠
賀川　治美
加治　正行
勝部　康弘
勝又　正孝
加藤　達夫
賀藤　均
加藤　誠
加藤　正彦
加藤　陽子
金子　一成
金子堅一郎
金原　洋治
加納　一彦
加納　芳郎
鴨下　和子
河　敬世
河西　紀昭
神崎　晋
貴田岡節子
北中　幸子
北本　育子
木野　稔
木村　宏
楠田　聡
楠原　浩一
工藤　充哉
工藤　協志
倉辻　忠俊
久保　政勝
小池　健一
小池　茂之
小泉　晶一
小泉ひろみ
河野　幸治
河野　陽一
香美　祥二
神山　潤
幸山　洋子
輿梠　ひで
児玉　浩子
後藤　彰子
後藤　敦子
後藤　雄一
小林　繁一
小林　正夫
駒田　美弘
小山　典久
小山　佳紀
斎藤　博久
嵯峨　六雄
酒井　規夫
坂田　和信
佐久間弘子
佐々木　望
四方あかね
重松　陽介
柴田瑠美子
嶋田　泉司
志水　哲也
清水　俊明
下条　直樹
下村　国寿
重里　敏子
白井　真美
白石裕比湖
白川　嘉継
白幡　聡
末延　聡一
杉本　徹
杉本　久和
鈴木　敏雄
鈴木　康之
鈴木英太郎
須磨崎　亮
清野　佳紀
関　秀俊
関根　孝司
瀬島　斉
千阪　治夫
高島　俊夫
高橋　協
高橋　孝雄
高橋　勉
滝田　順子
宅見　徹
竹内　義博
竹重　博子
武知　哲久
竹広　茂子
竹村　司
田代　雅彦
田中　篤
田中　英高
玉井　浩
田村喜久子
田村　正徳
千田　勝一
長　和彦
長　秀男
塚田　明子
辻　美代子
土屋　輿之
堤　裕幸
鶴澤　正仁
寺井　勝
寺門　道之
寺田　春郎
寺本　貴英
戸苅　創
富沢　修一
富所　隆三
永井　崇雄
永尾　尚子
長尾　秀夫
永島　哲郎
中畑　龍俊
中原　智子
成田　雅美
新津　直樹
西澤嘉四郎
西間　三馨
新田　康郎
布井　博幸
橋本　和廣
長谷川奉延
羽田野爲夫
服部　元史
花田　良ニ
馬場　常嘉
濱本　邦洋
早川依里子
早坂　清
原　寿郎
原　正守
春田　恒和
日暮　眞
平尾　敬男
平松公三郎
廣瀬　伸一
廣津　卓夫
深澤　隆治
福重淳一郎
福永　慶隆
藤井　達哉
藤枝　幹也
藤岡　雅司
藤木　伴男
藤田　弘子
藤野　滋
藤村　正哲
二村　真秀
船戸　正久
船曳　哲典
舟本　仁一
平家　俊男
別所　文雄
保坂シゲリ
保科　弘毅
細井　創
堀川　玲子
前川　喜平
前多　治雄
前田　美穂
正木　拓朗
松井　陽
松石豊次郎
松尾　宣武
松尾　雅文
松平　隆光
松永　伸二
松林　正
丸山　剛志
丸山　博
三池　輝久
水谷　修紀
南沢　享
宮島　祐
宮代　英吉
麦島　秀雄
村瀬　雄二
村田　要一
元山　福祥
森　哲夫
森内　浩幸
森尾　友宏
森川　昭廣
森口　直彦
森下　秀子
守田　利貞
森田　友明
森脇　浩一
師井　敏裕
八木　信一
安田　寛二
柳川　幸重
柳澤　正義
籔内　弘
山内　穣滋
山形　崇倫
山川　毅
山口　清次
山下　薫
山城雄一郎
山田　恭聖
山野　恒一
山本　圭子
山本　威久
山脇　英範
横田俊一郎
横田　俊平
横谷　進
横山　義正
吉岡　和之
吉岡三恵子
吉田　康子
吉田ゆかり
芳野　信
脇口　宏
和田　和子
渡邊　信雄
渡辺　博
渡部　礼二

賛助会員（法人）

※敬称略 五十音順

MSD株式会社
エーザイ株式会社
杏林製薬株式会社
第一三共株式会社
田辺三菱製薬株式会社
帝人ファーマ株式会社
株式会社ナチュラルサイエンス
Meiji Seika ファルマ株式会社
医療法人メディカル・プロ
和光堂株式会社

協賛企業

※敬称略 五十音順

アステラス製薬株式会社
塩野義製薬株式会社
ジャパンワクチン株式会社
武田薬品工業株式会社
大日本住友製薬株式会社
中外製薬株式会社
日本イーライリリー株式会社
日本マクドナルド株式会社
JCRファーマ株式会社
ノボノルディスクファーマ株式会社
マルホ株式会社

寄附者（個人）

※敬称略 五十音順

岡田　和子
永島　哲郎
吉川　武司
福山　幸夫

事務局

公益財団法人 小児医学研究振興財団
JAPAN FOUNDATION FOR PEDIATRIC RESEARCH

〒110-0015 東京都台東区東上野3-32-2 廣瀬ビル4B
TEL（03）5818-2601／FAX（03）5818-2602
e-mail:shouni-iken@jfpedres.or.jp

ホームページ http：//www.jfpedres.or.jp/

「子どもたちの世紀」について

News Letter題字の「子どもたちの世紀」は、日本小児科学会が創立百周年を迎えた当時の厚生大臣であられた小泉純一郎先生に揮毫をお願いしてご快諾いただき、総理大臣ご在任中にお書きいただいたものです。

編集後記

本年は当財団が公益財団法人として認可されて4年目の年にあたります。財団の活動は、なお揺籃期にありますが、ゆっくりですが、着実に前進しています。ご支援いただいた、多くの皆様に改めて深く感謝申し上げます。また、一人でも多くの小児医学若手研究者の研究活動を支援するため、より一層努めてまいります。ご存じのように、本年4月発足する独立行政法人「日本医療研究開発機構」は、厚生労働、文部科学、経済産業の各省が従来、別々に配分していた研究予算を一元化し、有望な分野に戦略的に配分する役割を担うこととされています。このプロジェクトでは、研究実績の少ない、若手研究者についても、研究計画や研究内容を重点的に評価し、研究開発の機会が与えられるように配慮する方針とされています。また、多くの希少疾患を対象とする臨床研究の場が開かれつつあります。小児医学若手研究者の積極的な関与を期待します。

現在、当財団が直面する最大の課題は財政基盤の脆弱性です。この脆弱性の克服なしには、当財団の展望は開かれません。小児科学会々員の皆様のご参画とご支援をよろしくお願いいたします。　**（常務理事　松尾宣武）**

2015年4月1日発行